

仕掛ける

中小企業基盤整備機構のインキュベーション施設「岡山大インキュベータ」(岡山市)が今年で設立5年目を迎えた。中小機構が中四国で運営する唯一のベンチャー支援組織として、産学官連携や中小企業の研究開発支援に力を入れてきた。鈴木幸次チーフ・インキュベーションマネージャー

岡山大インキュベータ・チーフマネージャー

鈴木幸次さん



「現在の運営状況や今後の課題を聞いた。——どのような施設なのか。」

すずき・こうじ 1971年同志社大工学部卒、アキレス入社。IT企業勤務を経て、88年岡山県産業振興財団に入り技術支援部長などを歴任。2008年から現職。埼玉県出身。66歳。



地域のベンチャー企業などが入居する

地場ベンチャー育成

産学連携へ橋渡し

「岡山大津島キャンパスの一角を、中小機構が賃借して2008年設立したベンチャー育成施設だ。延べ床面積約1600平方メートル。実験室仕様のテナント28室で構成。大学と連携して新事業への進出を円だが、入居後3年は岡山市から半額の補助を受けら

れる」

現在の運営状況は。「28室のうち入居しているのは21室で、目標の入居率9割には届いていない。開設当初は満室だったが、リーマン・ショック以降の景気低迷などで企業側の余裕が無くなったことが大きい」

か、システム開発のクレオス環境を整備していく。テラ環境からビジネスプラットフォームの作成支援、事業化まで、常駐スタッフによるサポートをさらに充実させる。事業構想を「アイデアのまま」で終わらせないのが大切だ。「中小機構としてのノウハウも生かしていく。各種補助金の獲得支援などで大きな強みがあり、国の『ものづくり補助金』では岡山大インキュベータが携わった13社が採択された。技術研究が優れていても、中小企業はこうしたノウハウに乏しいケースが多い。総合的な支援体制を強化していきたい」

「ただ、足元ではアベノミクスに伴う景況回復、政府の成長戦略への期待感などからベンチャー意欲が高まってきたと感じる。企業からの引き合いも強まっている。具体的には、大学など研究機関と企業を結びつけるマッチング機能だ。こまめな訪問を重ねること、優れた研究テーマを発掘し、実際に事業化を目指す」

聞き手は 岡山支局 阿部真也